

第3次佐倉市地域福祉計画に係る活動事例の「その後」の調査結果

1. 調査の概要

(1) 調査の目的

第3次佐倉市地域福祉計画及び中間報告において、地域の活動事例を調査し、その内容を普及・啓発している。その中で、第3次佐倉市地域福祉計画の進行管理及び第4次佐倉市地域福祉計画の策定に関して、現在取り組んでいる地域福祉活動を起こすきっかけ作りが、「その後」、地域にどのような活動の輪の広がりになっているかなどについて調査することを目的とする。

(2) 調査対象

第3次佐倉市地域福祉計画及び中間報告に掲載した活動事例（13団体）。

(1) 第3次佐倉市地域福祉計画（当初調査：平成26年8月～10月）

①西志津スポーツ広場の会 ②佐倉子育て応援団 ③「なごみ会」 ④根郷地区民生委員・児童委員協議会 ⑤思いやりヘルプサービスそめいの21 ⑥臼井台地区自治会／いきいきクラブたぐり（2事例） ⑦佐倉市手をつなぐ育成会

(2) 中間報告（当初調査：平成28年10月～平成29年8月）

①ねっこの会 ②とまとの会 ③佐倉地域包括支援センター ④笑いヨガ・ミュージック ⑤志津ふれ愛センター・しづっ子クラブ ⑥佐倉市こおろぎの会

(3) 調査事項

調査票により、①記載内容の変更点（前回の調査結果から）、②事例調査後の新たな動き、③地域への活動の輪の広がり、④現時点での、課題と今後の展開、⑤参加方法及び参加のきっかけ作り及び⑥関係機関・協力団体・連携団体などについて、調査する。

(4) 調査方法

各団体に電話連絡をし、調査の趣旨などを説明したうえで、郵送またはメールで調査票を送付し（前回の調査結果を添付する。ただし、計画書掲載の団体については、計画書の掲載部分ではなく（計画書用に、要約されているため）、推進委員会に報告したときの結果を添付する）、FAXまたはメールで回答をしてもらう。

(5) 調査結果

①調査のまとめ（次ページから）

②（資料1－2）【調査項目ごとのポイントと思われる点（各事例から抜粋）】

③（資料1－3・4）事例ごとの調査結果（第3次計画掲載事例・中間報告掲載事例）

2. 調査のまとめ

調査結果から見えてくる、地域福祉活動における、特徴的なポイントをまとめたものです。

(1) 拠点（集まれる場所）の持つ効果

- 集まれる場所というのが1つのポイントであると思われる。ラジオ体操や佐倉ふるさと体操など毎日集まるものもあれば、サロンのように月1回のものもある。
- 交流の場があることは、住民の方のモチベーションにつながる部分がある。また、1人暮らしの高齢者の方など、家に引きこもりがちの方が、外に出るきっかけにもなる。
- 集まれる場所というのは、見守りの機能を持つことがある。いつも来ている人が来ていないと、何かあったのかなと気付くことができる。

(2) 挨拶から生まれる関係性（将来へのつながり）

- 体操、朝のあいさつ運動や下校時見守りなど、「挨拶」は1つのポイントであると思われる。挨拶をすることで、お互いの顔が分かり、関係性が構築される。また、それが学校の場合、学校との信頼関係も構築される。
- 子どもと挨拶をすることは、子どもとの関係構築にもつながる。また、地域ぐるみで子育てをすることになるし、子どもが地域に愛着を持ち、将来の地域への定着や将来同じように地域福祉活動に参加してくれることにつながる可能性がある。

(3) 負担にならない・楽しむ・得意分野で

- どの団体も、自由に、負担にならないように、できることをという点は共通しているのではないと思われる。また、ボランティアをしているというのではなく、自分も楽しむという点も共通しているのではないと思われる。
- 「支える側」という点からすると、得意な分野で関わってもらおうという視点も見られた。例えば、学習支援・子ども食堂では、学習を見ることはできないが、食堂の手伝いなら、という関わり方がある。
- 活動をすることで、つながりができる。また、活動している人に、地域のためにという意識が芽生えることがあり、地域の他の活動にも関わってみようという人が出てきたり、1つの活動が別の活動につながっていく。

(4) 社会福祉法人の地域貢献

- 社会福祉法人の地域貢献で、助成・応援・協力をしてもらっている活動がある。

(5) 積極的な広報活動・情報共有と口コミなどの個人のつながり

- 参加のきっかけ作りについては、口コミや個人的な勧誘というものが多かった。ビラの配布や回覧などの効果は限定的なのではないかと思われる。地域や団体の集まりに出向いて紹介という方法を取っている団体もあり、ビラの配布などの全体的な広報とともに、個人的な勧誘を含めて、直接話をするという方法が効果的なのではないかと思われる。
- 活動をする中で、いい面や改善すべき点などが出てくるとと思われる。それを他の活動団体と共有できる仕組みがあれば、それぞれの活動がより進んでいくのではないかと思われる。

(6) 担い手の確保（子ども・学校との関わり）

- 若い世代という観点からすると、子ども・学校との関わりというのはポイントになってくるとと思われる。学校との関係性ができている団体がある。学校は地域の中で大きな役割を担っていて、子どもが地域とつながることになり（保護者ともつながる）、「支える側」、特に高齢者の方が、子どもたちと接すると、元気になるという話もある。

(7) 担い手の確保（若い世代の参加に向けて）

- 「支える側」の高齢化という問題はどこも共通しているのではないかと思われる。若い世代のボランティアの参加は、活動の継続性という点から、ポイントになると思われる。その際、負担のないかたちでの参加や得意な分野での参加など、参加の仕方にもいろいろなものがあるということを伝えることができるかがポイントになると思われる。
- 中間報告において、団体アンケート調査を行ったが、「地域福祉活動に参加したことで、自分が変わることができた、また、成長ができたと思いますか。」との設問に対して、「思う」と「どちらかというと思う」を合わせた割合が83.9%となっていた。ま

た、活動に関わったことで、別の活動につながるということもあるので、まずは参加してもらうようにすることが大切であると思われる。

- 若い世代は仕事をしていることが考えられる。具体的なボランティア活動ではなくても、近所の方と挨拶をし、地域と顔が繋がっているということが重要であると思われる（災害時ということを考えても）。
- 若い世代が定期的な活動に参加することができなくても、例えば、防災訓練など、単発の行事でも参加してもらい、そこからつながりを続けていくことが必要であると思われる。